

「フィガロ」紙（2017年2月21日発行）より

指揮者たちの楽園、日本を旅して [*]

文：クリスチャン・メルラン

*タイトルは「フィガロ」電子版より和訳

今年もまた昨年と同じ季節に、日本の文化庁が欧米4か国-アメリカ、イギリス、オーストリア、そしてフランス-から音楽批評家を招いた。自国のオーケストラの演奏水準を客観的に明らかにすることがその趣旨だが、付随的に、各楽団に授けている助成金が有効に使われているのかを見極めることも意図されているようである。われわれ批評家は今回も、日本各地の音楽界にみなぎる驚くべき活力に圧倒された。4名を迎えてくれた日本オーケストラ連盟は、常務理事の桑原浩を中心に完全無欠な運営がなされている団体で、現在、日本中の34の楽団を擁している。批評家陣はといえば、西洋人のステレオタイプなイメージをそのまま体現する顔ぶれである（社交的なニューヨーカー、冷静沈着なイギリス人、愛嬌のあるウィーンっ子。フランス人の私については読者のご想像にお任せする。）昨年は東京を中心に視察を行ったが、今年は広島、福岡、金沢、大阪と、地方都市をまわった。

各地で必ず目につくのは、クラシック音楽、とりわけオーケストラに寄せられている、あふれんばかりの愛情である。昨今の西洋社会では、19世紀の産物であるオーケストラという表現形態を21世紀にも存続させていくことに、懐疑的なまなざしを注ぐ者が少なくない。一方で日本のクラシック界は、指揮者にとって楽園のような様相を呈しているのだ。これを象徴しているのが、東京の楽団を率いることになったパーヴォ・ヤルヴィである。

もうひとつ印象に残ったのは、日本のあらゆるオーケストラにみられる特徴である。つまり、ハイレベルな技術と、完璧な演奏をせねばならないと考える強迫観念にも似た姿勢だ。ときにそれは、音楽を麻痺させてしまうことにもなる。正確な演奏を目指そうとする意識が、個々の奏者の自由な発想や反応を抑えつけ、どちらかといえば独創性に欠ける音楽を生んでしまうことになるのだ。それは広島で聴いた、ベートーヴェンの交響曲第5番の演奏についても言えることである。しかし、ここでは決まりきった発言に終始することは控えたい。例えば、リュウ・シャオチャが振った九州交響楽団は、ぬくもりのある情熱的なメンデルスゾーン[交響曲 第3番「スコットランド」]を聴かせてくれた。彼らの演奏様式は作品に見事に合致していたし、この爽やかな音楽が備えている深みと怪快さが、このうえなく巧みに織り交ぜられていた。金沢でもマルク・ミンコフスキの棒が、生き生きとした劇的な《セヴィリアの理髪師》を展開させた。

とりわけ忘れがたいのは、大阪で聴いたショスタコーヴィチである。驚異的なまとまりと熟気のみせた大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏を率いた井上道義は、このソ連の作曲家の音楽を理解する機会を提供してくれた。井上は、ある種の容赦ない残忍さを第11番と第12番の交響曲から引き出し、ソヴィエトの人々が経験した悲劇の真ただなかに、聴く者をいざなった。70歳の井上自身が、コンサートというスペクタクルの一部を担っていることは特筆に値する。なぜなら彼は、まるでダンサーとサムライの所作を融合させたような、きわめて独自の身振りでオーケストラに語りかけるのだ。このカリスマティックな指揮者が、欧米で活躍していないのは妙である。フランスのオーケストラは、彼の魅力のとりこになるはずなのに！

さて、今回われわれ4人の心をもっとも強く揺さぶったのは、お察しの通り、1945年8月6日の悲劇を伝える都市、広島での公演である。演奏意欲にあふれる広島交響楽団には、他の地方都市のオーケストラのように、もっと質の高いホールがあてがわれる資格がある。この楽団は、平和の重要性を訴える数々の活動を行っているが、今回はソリストとして招かれたモントリオール出身のシャルル・リシャール＝アムランが、被爆したアップライト・ピアノでリサイタルも披露した。この楽器は、原爆投下の翌日に亡くなった少女が弾いていたものである。われわれ批評家は、国連で核兵器根絶のメッセージを発信したことがある広島女学院高等学校の生徒たちとも交流することができた。マルタ・アルゲリッチの後援のもと、広島交響楽団は2016年にシンフォニア・ヴァルソヴィアと提携を結び、ワルシャワと広島でベートーヴェンの交響曲第9番を演奏している。こうした取り組みは、広島で平和を願う国際的なオーケストラを立ち上げる2020年に照準を合わせて、今後も継続されていくとのことである。高い芸術性と人道的な使命を同時に実現させようという野心的なプロジェクトであるが、このふたつの理想こそ、まさに今の時代が求めているものなのではないだろうか。